

# 『国民之友』に表れた同志社

——「同志社大学設立の旨意」発表の頃まで——

## 大越 哲仁

ああ、『国民之友』読まれたり

内田魯庵は、著書『おもひ出す人々』の中で、「徳富蘇峰は『将来之日本』をひっさげて故山から上って帝都の論壇に突入し、続いて『国民之友』を創刊して文名隆々天下を圧する勢ひがあった。當時の青年は皆其風を望んで蘇峰に傾倒し、『国民之友』は殆ど天下の思想界に号令する観があつた。」と語っている。

徳富猪一郎が平民主義を掲げて明治二十年二月に発行した『国民之友』は、このように江湖の大歓迎を受け、発売当初から全国に渡って圧倒的な影響力を取めた。この成功に勢

いを得た蘇峰・猪一郎は、同誌の巻頭社説群や時事欄に堂々と恩師新島襄や同志社の記事を掲げながら「余は平生新島先生に恩義を感じ、何時かは報いる機会のあるべしと考へていたが、今やその機会の到来したるを認めたい」(『蘇峰自伝』)として、新島を助けて同志社大学設立運動に尽力した。その時、『国民之友』は、新島襄と同志社の名を天下に知らしめず重要な媒体の一つになった。

### 新日本の二先生

およそ日本国中の人々が新島襄の名を知るようになったのは、明治二十一年三月二日発

行の『国民之友』第十七号に『福沢諭吉君と新島襄君』という巻頭社説が掲げられてからではないだろうか。それまでの新島は、全国的には、政府高官や宗教家、教育家等、限られた人々にしか知られていなかったように思われる(蘇峰著『我が交遊録』等参照)。この社説で、新島は、すでに教育事業で成功した福沢と共に「明治年間教育の二大主義を代表する」人であり、泰西文明の「二大原素」輸入の案内者であると紹介された。つまり、福沢は「物質的知識の教育」の代表者であり、彼によつて泰西の物質的知識上の文明は日本に案内され、一方、新島は「精神的道德の教育」の代表者として、泰西の精神的道德の文明をまさに案内しようとしていると。しかも、この社説では、物質上の文明は、いわゆる文明の「花」であり、いかに美麗、便利でも、その根柢(精神的道德の文明)を移し持つて来てこれの涵養をしなければ、「一朝にして枯死」すると説き、新島の事業の一日も早い成就を祈念している。この社説を読んだ人々は、あの福沢諭吉と並ぶ教育者として新島襄の存在を強く覚えたに違いない。

論説発表の数日後、蘇峰は、新島に書簡を

送り、「端緒を開く心づもりで、先生の教育主義と福沢君の主義とを対照しました。もちろん、福沢君の主義には不満不足不同意の点山々ありますが、あまり反駁すれば、議論は党派的に流れ、読者の感覚を悪くするようなことになってはまずいと思ひ、できるだけ公平平穩にいたしました。」（森中章光著『新島先生と徳富蘇峰』）と書き、なお、新島や同志社の事を『国民之友』誌上で「続々論書する積りに御座候」と伝えた。

### 人民の手に依る私学・同志社

その言葉通り、蘇峰は、次号の第十八号（三月十六日発行）に『私立大学』を掲載したのをはじめに、『国民之友』誌上に続々と新島、同志社に関する記事、論説を掲げた。

まず、『私立大学』で蘇峰は、「官立の学校は、多くは官吏を製造するの機械となり果てたり」という状況にあつて、人民の手によつて一個の私立大学さえもないのは、日本人の一大恥辱である、と嘆き、「教育とは唯だ書を読み、学を修め、利巧者になる迄の事なりと極まりたる今日に於ては、独立自治の生面

を開き、仰いて天に愧ぢず、俯して人に忤じず、良心を手腕に運用する人物を養成するの私立学校は殊に必要とするに非ずや、同志社英学校長、新島襄君之れを思ふこと久し」と、新島の教育思想の一端を披露して彼の私立大学設立運動に対する賛意を示した。その頃日本にあった大学は、二年前（明治十九年）に東京大学から改称された帝国大学だけであり、それも、それまでの欧米文化の移植に努めた「啓蒙的色彩」から「国家の須要に応ずる學術技芸」の教授・攻究を目的とする、官吏養成が重要な任務に変わつていた（『日本近現代史小辞典』角川書店）。だから、平民主義の旗下に集つた『国民之友』の読者は、この『私立大学』の記事に眞の教育の意味を感じ取つたに違いない。

『私立大学』の記事がでて一週間を待たず、都下の有力な新聞（時事、報知、毎日他）や雑誌に、同志社英学校の紹介と、その大学設立運動を支持する記事が掲載された（二十一日、東京で都下の有力新聞雑誌記者を招いて同志社主催の夜会が開かれた折り、金森通倫が彼らに同志社への支持を訴えた演説の紹介記事）。この報道は、帝都に大變な評判を呼ん

だ。蘇峰は、新島に、「東京致る処、同志社大学の評判あり。」と報告し、「今度もしも国民之友出でば、その評判全国に蔓延仕る可しと存じ候。」と書き送つた（森中章光著前掲書）。その時、蘇峰は、『国民之友』次号にこの時の金森の演説（『同志社の規模及び目的』）を掲げ、自らも、一大論説を論述するつもりであつたのである。

すなわち、『人民の手に依りて成立する大書』がそれで、同志社第十九号（四月六日発行）に巻頭社説として掲載された。この論説は、現今の「我邦」に欠乏しているものを、「精神元氣」上、「道徳品行」上のもので、「機械的の知識」ではなくて、「機械的の知識を運用する所の精神」として、この社会の需要を満たす事業こそ同志社大学に望むものであると断言し、同志社大学の設立は、「一個人一党派の人によつて成立す可きものにあらず、いやしくも新日本を扶植せんとする人民は皆心を合わせ、力を併せて、之を翼賛するに於て、遅疑す可べき事に非ざるを信ず」と続けて、最後に「嗟呼自治の教育を欲する人は、之を賛成せよ、人心の腐敗を憂ふる人は、之を賛成せよ、（中略）我が新日本を建設し、国家人

『国民の友』記載分

同志社大学義損金申込者数内訳（申込金額別）\*1

（明治21年12月7日～明治22年12月22日までの一部\*2）

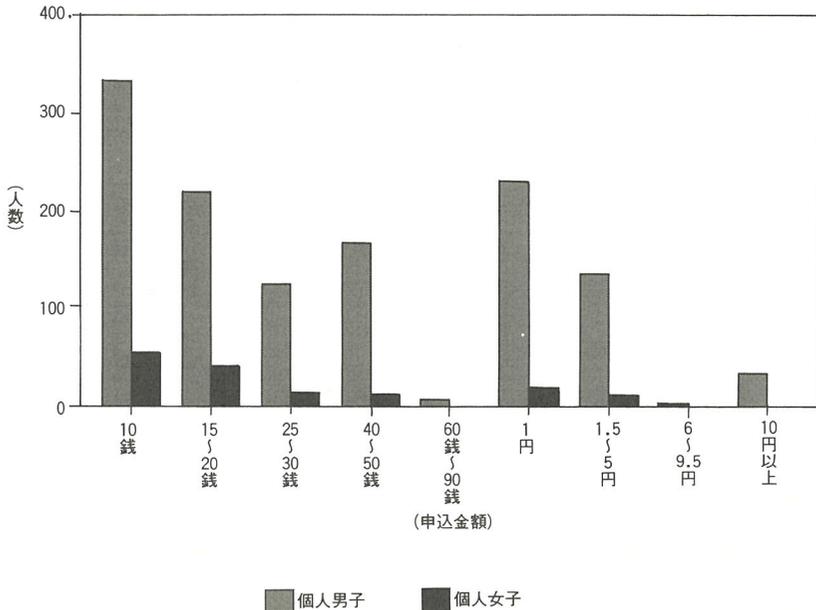
申込金額	合計 申込件数	区 分*3				
		個人		団体		
		男	女	教会関係	学校関係	その他
10銭	388	334	53	1		
15～20銭	258	219	39			
25～30銭	138	122	14		2	
40～50銭	177	166	11			
60～90銭	8	5	1	1		1
1円	255	231	22	1	1	
1.5～5円	153	135	10	2	1	5
6～9.5円	3	1			2	
10円以上	39	32	3	2		2
合計	1419	1245	153	7	6	8

\*1：『復刻版国民の友』（明治文献）によって著者がまとめた。

\*2：集計対象は、35, 36, 37, 38, 40, 41, 45, 47, 48, 49, 50, 51, 57, 61, 67, 68の各号である。資料に欠番があったこと、せっかく資料があっても印刷品質によって判読不可能な文字があり、これらの理由で大学設立運動当時に同誌に記載されたすべての人を集計する事が出来なかった。しかし、全体の傾向は本表によって知ることが出来る。と考える。

\*3：団体名と個人名併記者は個人として数えた。

個人義損金申込者分布



民の不朽生命を保持せんことを熱心する人は、之を賛成せよ、真理を愛し平和を愛し、進歩を愛する人は之を賛成せよ。」と締めくくった。同志社大学設立運動は、正に、京都の一私学の問題としてでなく、日本全体の為の事業として捉えられたのである。

### 「同志社大学設立の旨意」と義損金

その後も『国民之友』には、新島が四月に行つた知恩院における演説（第二十一号『私立大学ヲ設立スルノ旨意、京都府民に告グ』）や、七月の大隈邸での有力者との懇談会の記事（第三十三号『同志社大学』）が掲載された。その間、蘇峰は、病身に鞭打つて大学設立運動の為東奔西走する新島の指示、添削を受け、我が国の教育史上傑出した名文、『同志社大学設立の旨意』を起草した。この「旨意」は、新島襄の名で同年十一月七日をもって全国の主要な新聞雑誌上に一斉に掲載され、各新聞雑誌社は挙つて同志社大学義損金募集の任に当たつた。これと同時に、同志社諸学校に在籍中の「約一千名の」教職員学生は、全国にちらばる校友と共に必死の努力で父兄親戚に

訴え、また、全国の組合教員もこれと呼応して義損金募集に努めた（湯浅興三『新島襄傳』）。『国民之友』も第三十四号（十一月十六日発行）に賛同記事と共にこれを掲げ、義損金の受付を開始した。

この義損金の申込者の名は都度、受付紙誌上に記載されたが、『国民之友』上に記載された人数は、筆者が確認できた範囲だけでも千四百人を越す。その金額別申込者の内訳を表に示すが、これを見ると、全体の七割が円未満の寄付者であり、十銭の寄付者が三割もいる。これは、同志社大学設立運動が当時の日本で、いかに広く一般の人達から支持、支援されていたかという証左であろう。二、三、例を示せば、長崎の第五高等中学校の学生三十四名が十銭、十五銭と出した例（第四十五号）、上州の小学三年生と四年生の女の子が並んで三十銭、二十銭と寄付した例（第五十号）、とりわけ、福島県の福島、中村、若松、白川各監獄の職員合計九十四名が、それぞれ十五銭、十銭と義損金を捻出した例（第五十七号）は、当時の彼らの社会的地位と常時接する相手を考えるとき、彼らが、「一国の良心ともいふべき人々を養成せん」と欲する同志

社を信じ、熱く望むところがあつたのであると筆者は確信する。

以上、『国民之友』に表れた同志社大学設立の旨意発表の頃までに限つて眺めてみた。

現在の我々は、同志社大学を京都の有名私学としてのみ捉えることが多いが、大学設立運動当時、日本中の人々が信じ、願つたのは、帝国大学に対峙し、良心を手腕に運用する人物の養成を行う、人民の大学としての同志社だつた。

同志社人たる我々は、百年前の『国民之友』読者の願いを深く心に刻んで、日々の生活を送りたいと思います。

（一九八四年大学法学部卒業・  
セイコーエプソン株式会社勤務）

# 夢の途中で

## 青木苗子

宵つぱりで朝寝坊の私たちに育てられたせいで、昼寝は夕方になってからするものだと思ひ込んでいた二歳の息子は、その日も、検察庁に来る途中で眠ってしまった。

こんな格好で喜びを表すにはどうしたらいいだろう。B4用紙に小さな活字で印刷された番号と氏名を見てから、午後五時という妙な時刻に京都地検の掲示板の前に集まっている人だかりをやつとの思いで抜け出たとき、私は、眠っている息子を肩に抱いた自分の格好が、紙の上に自分の名前を見つけた喜びを表すにはいかにも不つりあいであることに気付いて苦笑してしまった。

職業を持たないまま結婚し、子供を産んで

しまえば、個人のフルネームで呼ばれる機会などめつたにない。結婚後の姓が始まる、公けになった経験の少ない名前デビューしたこと、少々照れながら、私は、後戻りできない場所に来てしまっていることを感じていた。

雨が降り出していた。息子を横抱きにして狭いドアをくぐり、タクシートのシートに腰をおろしたとき、司法試験を突破するにはあと二つも試験を受けなければならないことを思い出した。息子の方は、不自然な姿勢からやつと解放され、安心して眠りについたらよかった。

\*

これが、何度目の受験だっただろう。「仕事をもちたいの」と高校の頃から言っていたくせに、大学時代は、はっきりした目標も持てないまま、その時その時興味のあることだけに没頭する毎日を送っていた。

「本当に楽しいと思えることつて、人生の中でそうあるものじゃあないよ。」とその頃の友人が言ったことがある。「だから、本当に楽しいと思えることを見つけたら、何をかおいても、そのときを大切にしましょね。」

多少後ろめたい思いで中途半端な生活をしてきた私は、この言葉に久し振りに感動した。そして、それからは心おきなく遊び、好きな本を読み、気に入った授業にしか出ないことにした。「本当に楽しいと思えること」を見つけたら、やりたい仕事も分つてくるだろうと思っていた。ところが、困ったことには、大学を卒業しなければならぬ時になつても、「やりたい仕事」は一向に見えてこない。そのまま企業に就職する気にもなれなくて、学生のままであれば何とかならんじゃあないかという安易な思い付きで、大学院に行くことにした。

しかし、これは失敗だった。ドイツ語で刑

事訴訟法の教科書を読んだり、刑法の理論史を調べたりする作業に、私は熱中することができなかった。研究者になるために必要なのは、明確な世界観と、一つのテーマを追い続ける粘り強さを持つこと。その二つとも、私には不足しているように思われた。大学院に入ってあげた一番の成果は夫と知り合ったこと、と言えば、お世話になった先生方はがっかりされるだろう。だけど、できの悪い学生の就職の世話をしなくてすんだのだから、先生方も夫に感謝すべきだと思う。

\*

そういうわけで、大学院をやめて結婚することにしたが、べつに仕事を持ちたい気持ち捨ててしまったわけではない。夫との生活は恋愛の延長であって、結婚を人生のゴールインと表現されるのには抵抗があった。

もちろん、「君ね、そういう選択は、登りかけたピラミッドから別のピラミッドへ飛び移ろうとするようなものだよ。」と言った指導教授の呆れた顔を忘れたわけではない。婚約報告のついでに、大学院をやめて司法試験を受けたいと口をすべらせた私を、教授はまじまじと見つめたものだった。

たしかに、大学の正規の教員になるのも大変だが、二%を切るといわれる司法試験の合格率は、それだけでうんざりするに十分な数字である。おまけに、試験は短答式、論文式、口述式と約半年にわたって行われるという。婚約報告ともいうれしそうな顔で話題にしたのは間違いない。私は軽率さを反省し、できるだけ深刻な顔をして、「そうですか。」と深くうなづくことにした。しかし、試験がむずかしいということは、大して気にしていなかった。法学の精緻な理論を作りあげることに魅力を感じることはできなかったが、

代わりに、世の中に対する様々な人々の様々な思いを実現する手段としての法律には、興味を持ち始めていた。そして、興味があつて、自分に向いているんだつたらそのうち何とかなるものだと思うていたからである。

\*

とはいえ、結婚当初の私は、そんなことはすっかり忘れて生活を楽しんでた。それまで親と一緒に住んでいて家事に無関心だった分、自分で生活をつくることを知って、それに夢中になってしまった。ほとんど一日中家にいる夫と自分のために、限られたお金で三

食の献立を考え、買い物に行き、本を見ながら何時間もかけて食事を作る・・・これはやってみるとなかなかスリルがあつて、楽しい仕事である。毎日毎日がほとんどそれだけのために費やされ、それで結構満足していた。

ただ、こういう生活は一年もすれば飽きてくる。それは当然予想されたことであつた。毎日、机に向かって勉強している夫にそうそう遊んでもらえなくて、退屈し始めてもいた。私は野菜スープレの灰汗をすくいながら、そろそろ司法試験のことをまじめに考えなくつちやと、心の中でつぶやいた。

\*

受験勉強を本気でやり出したのは、長男が生まれて一年を過ぎた頃だったと思う。

恋愛の延長だった生活は、子供ができると一変した。神経質だった息子は、私が片時もそばをはなれることを望まず、彼を寝かしつけるためには何時間も彼を抱いて歩き回らなければならなかった。息子の起きているときに家事をしようのは至難のことである。彼が寝ついたあとに用事をすれば能率的ではあるが、それでは新聞や本を読む時間さえな

くなつてしまふ。徐々に、家事や育児は楽しみだけでなく義務と化した。

結婚は、生活の楽しさを私に教えただけでなく、きらきら光る小さな命までこの胸に預けてくれたが、その代わり、その重みは、私から自分の足で世界を歩く力まで奪つてしまつたように感じられた。世の中はだんだん遠くなつていくようにも見えた。もつと軽やかに生活と「仕事」を両立させていけると考えていた私は、何とか早く立ち上がらなくてはとあわてた。

生活は大切にしたい、子供も大切にしたい、でも、自分でもつと広い世界をつかみたい。欲張りでわがままな要求である。でも、そのすべてが私の自然な要求であるなら、かなわないはずはない。自然な欲求と実際の生活の間にギャップがあるのなら、それを埋めていけるのは自分しかいない。

気持ちにゆとりさえあれば、家事や育児は決してつまらない仕事ではなかった。生活と子供のための時間がどうしても必要なのなら、できるだけ楽しんでやつた方がいい。その代わり、それに費やす時間は可能なかぎり切り詰めよう。私の二四時間は教時間ずつ切

り取られ、残りはいよいよ二・三時間にしかならなかったが、好きな生活をしているのだからしかたがなかった。私はできることしかできないんだからと居直り、自分で選んだ生活を楽しめるだけ楽しんでやろうと割り切つた。

\*

なんでも初めての経験が印象的なもので、雨降りの日の翌年の短答試験合格発表の日は、何にも覚えていない。覚えてるのはその後一挙に七科目にふえる論文試験まで一か月しかないという焦り、それから、論文試験の二週間前に始まつたつわりの苦しさ。

その年の論文試験は七月一日に始まるという。ちよつどその一か月前から、私は息子を連れて実家で生活していた。何にも妨げられずに勉強できるのが楽しいと思えるなんて、子供ができるまでは想像もできないことだった。庭に水を撒きながら喚声をあげて遊んでいる息子の声が聞こえてくる。実家の二階の部屋で、昔からこんなに勉強したらもつと賢くなつただろうなと、自分の勤勉ぶりに感心しながら、私は、毎日勉強し続けていた。

体調がおかしくなつたのは、七月に入つたころである。勉強のし過ぎではないかと真剣に心配したが、そのくせ内科ではなく産婦人科へ直行したのは、少々やましいところがあつたせいだろうか。まあ結婚しているのだから、そういうこともあるかもしれない。

事情を話して、つわりを少しでも軽くしてほしいと頼んだら、産婦人科の先生は、「気のせい、気のせい。」と言つて笑つた。たいいていの産婦人科医はそういう風に言うそうだ。でも、本を読もうとしてもこみあげてくるこの吐き気、無理に文字を追おうとすれば痛む眠と頭。横になつて休んでいるといつのまにか眠っている。これが気のせいなもんか、と怒りながら、胎児に影響のない弱い薬なら注射してあげようという先生のとこに毎日通うことにした。

胎児は刺激の強いものを受け付けないらしい。コーヒは香りがなくなり、煙草の匂は吐き気を催し、玉葱や生姜は食欲をますます減退させる。酒はどれも薬品のアルコールの匂いがする。すべての刺激物を退け、私の体はだんだん清浄になつていくようだった。

\*

三日間の論文試験はどういう風に終わったのだろう。いくつかの科目は薄い教科書を通読することもできないまま試験を迎えてしまった。わからなくても何か書ければいいと、予想論点をざっと見て、見知らぬ単語を頭詰め込んで臨んだ試験だった。寝転がってうたた寝の合間に勉強するには、悪評高い各種受験団体のテキストやカセットテープがどんなにありがたかったことか。

\*

そして一九八八年の二月、私は暖房のきいた産院の部屋で『ノルウェイの森』を読みながら、ベットに横たわっていた。もう試験なんて受けなくたっていい、もう分娩の苦しみからも解放された。当面何もしなくていいなんてあまりに楽すぎて後ろめたい気さえする。今から思えば、あつけない幕切れ。しかし、論文試験に落ちていたら、生れたての乳児をかかえ、五月からはじまる新しい試験にまた挑戦しようという気力はたぶんもう持てなかつただろう。三時間おきに娘に母乳を飲ませにいく部屋のテレビは、橋本聖子のスケートを繰り返し放映し、私は、暖かくなるころにはテニスができるかしらと、まだ小さくなり

きらないお腹を見下ろして考えていた。

\*

それから二年がたち、もう一度、司法研修所で二回試験と称する試験を受けさせられたが、これこそ最後の筆記試験になるだろう。この春、三四歳にしてようやく私は、京都で弁護士として仕事を始めた。

医者が家族の風邪に無関心になるように、弁護士も身近の小さな不幸には鈍感になるかもしれない。小学校に行き始めた息子は、「お母さん、また給食のナフキン入れ忘れたでしょう。」などと毎日のように私を非難し、息子の代りに二歳になった娘は、保育所に行くのはいやと駄々をこねて毎朝父親を悩ませてくれる。私よりも家にいることの多くなつたその父親は、いやおうなしに意識改革を迫られ、私の母は、毎午後、ふーふー言いながら自転車で通ってきている。

「自然な生活をやっていくためには、たくさん人の犠牲を覚悟しなければならぬのだらうか。それでも、家族がこんな風にいるんなことをやりながら一緒にいるのはいいことだと思っているのは、きっと私だけでない。いつかそれを確かめてみたいと思いつつ果た

せないまま、慌ただしく事務所に駆け込み、日程表をにらんで、より円満な事件処理の方法はないかと頭を絞っている毎日である。

「仕事」を持ちたいという私の夢は、弁護士のなることで一応は果たされた。でも、本当の夢は、様々な事件の向こうにまだ茫然としたまま拡がっている。「仕事」は、世界を自分の足で歩く一つの手段。二%という合格率は弁護士になってしまえばほとんど意味がない。多様な知識と的確で素早い判断力がこの仕事に必要な最大の武器であること、そして、日々の仕事を通じて自分の世界観らしきものが作られていっていることを実感しつつある。とりあえず、弁護士として私にできる最大限のことは何かを一件一件考えながら事件に取り組むことが、幸運に恵まれてここにこうしている私の当面の仕事だろう。

元気に生きること。楽しく生きること。そして、まじめに生きること。これが、今までと同じように、現在も夢の途中にあるわたしの単純なもつとである。

(一九七八年大学法学部卒業・一九八二年大学大学院法学研究科公法学博士課程前期修了、弁護士(京都弁護士会所属))

# ゲーテと化学

## 河野 収

いま、ゲーテが面白い——工学部の外国書講読で、ゲーテの戯曲『ファウスト』を読んでいる学生諸君の感想である。詩人で、小説やドラマも書いたゲーテ（一七四九—一八三二）が、化学と一体どんな関係にあるのか。彼の不朽の作品の主人公ファウスト自身が、そもそも十六世紀の不老不死の霊薬を作るイアトロ化学の祖、パラケルススを思わせる人物である。そして、作品全体に化学の思想が反映されている。冒頭のモノローグ「哲学も、法学も、医学も、神学までも研究した」のは、ゲーテ自身のことでもあるが、彼はさらに、鉱物学、地質学、植物学、動物学、色彩論、化学など、自然科学の多くの分野で活躍して

いる。とりわけ化学との結びつきは、『ファウスト』の作品にかけた歳月と同じ六十年に及ぶ。ゲーテは一七六八年ライプツヒの学生時代に、不摂生から吐血して、生まれ故郷マイン河畔のフランクフルトに帰った。主治医はパラケルススの信奉者で、彼に錬金術書を薦めた。母親の女友達からは、健康法として神秘的魔術を教えられた。その影響を受けて、彼は独学で錬金術の実験に熱中する。健康が回復すると、シュトラーヌブルク大学に入学、法学の勉強をして、博士号をとった。しかし化学を捨てたわけではない。「人目をしのぶ仲間」と言つて、化学の講義を当時の有名なシュピールマン教授から受けている。『ファウス

ト』に出てくる「自然操作」なる語は、教授の使っていた術語である。一七七〇年二人の学友とザール地方を旅行し、明礬坑、ガラス工場、炭鉱を見学している。「一生涯念頭を離れなかつた経済的、技術的観察への気持が、この時はじめて呼び覚まされた」と、『詩と真実』で語っている。

一七七五年秋、二十六歳のゲーテがワイマルにあらわれている。その前年に出版した小説『若きウェルテルの悩み』で有名になっていた彼は、カール・アウグスト公の招きを受けたのであつた。以後、宰相の地位にも就く幸福な生涯を送ることになる。とくに科学政策に力を入れ、イエナ大学に化学実験室を建て、化学器具や試薬などの資金援助を行なつた。リービヒがギーセンに世界的な実験室をつくる二十年以上も前のことである。また当時の指導的な化学者を迎えて、ドイツの他大を凌駕している。たとえば、ゲーテと共にピートから砂糖を得る研究をしたゲットリング、一八一六年三つ組元素の存在を認めて、メンデレーエフの周期律発見への機縁をつくれたデーベライナー、人參からカロチンを発見したヴァッケンローダーらである。なかで

も、デーベライナー教授とは多くの共同実験を行なっている。イルメナウの石炭から水性ガスと石炭ガスを作った。ベルカの町に出る硫黄泉の利用を考えて、今日の温泉の基礎を築いた。硫酸接触法に白金の触媒作用を認めている。またガス灯の研究も行なっている。

化学に対する貢献だけにとどまらない。植物園の拡充、鉱物学の学術団体の結成、科学博物館の建設、解剖学教室の改造、産科診療所と助産婦学校の設立、大学病院の創設など、科学の振興にあたった。「フアウスト」第二部第五幕、宮殿の広い前庭の場面で、開拓の大事業が行われている。山のふもと沼地から出る毒気が、せつかくの拓地に大きな被害を与えているので、排水溝をつくって人々の健康をまもうという句がある。ゲーテは今日という予防医学や、公害対策にあたる考えをもっていたものと思われる。

ゲーテは、興味をもつ自然科学の問題に、自分で実験したり、専門学者との意見交換を通じて、また大がかりな研究旅行をしたりして、近づいていった。鉱物学の知識について、「どうしてもわからなければ、足をつかって習得した」と述べている。彼は直接見学するこ

とによって、当時のほとんど全部の工業部門について、自分の判断を磨いていった。ゲーテの叙情豊かな詩の一つ「すべての峰に憩いあり……」は、キツケルハーンでの鉱山視察旅行の時に生まれた。彼はあらゆる分野に目をくばったばかりでなく、ドイツ以外での業績も見のがさなかった。ほかで発見されたものは、直ちにテストされた。座右にした化学の研究書や辞典だけでも枚挙にいとまがない。スウェーデンの化学者ベルセーリウスとは二度会っているが、一八二二年ボヘミア地方の小村エーガーではじめて会った時の印象を、ゲーテは息子にあてて次のように書いている。「話は生き生きとして有益だった。ベルセーリウスは吹管で、この上もなく美しい実験を見せてくれた。全部記憶に留められるといいのだが。」ベルセーリウスの『鉱物学の新体系』は、ゲーテにとつてその年のクリスマスイヴの読み物であった。時のたつのも忘れて読了した。死の前年にあたる一八三一年には、リービヒとヴェーラーとの共著『シアン酸に関する研究』論文に目を通してゐる。そして死の一カ月前、八十三歳の老ゲーテが読んだのは、リヴァプール・マンチェスター間

の鉄道の設計に関する報告書であった。

ゲーテは、論文「分析と総合」で、この両者はお互いに前提としなければならぬとして、「分析学者の陥る大きな危険は、彼の方法が総合を基礎としないで用いられるところにある」と述べている。ゲーテの有機化合物の合成実験も、完全に自然のものとして形成されるための証明材料である。さらに、合成実験の根底にあるのは、化学反応の可逆性の概念であった。彼はくり返し化学合成の意義を強調した。「結合するために十分に分離し、分離するために十分結合した人にして、はじめて思考することができる」とも言っている。

ゲーテの自然観察は、形態から出発しており、大部分が比較形態学である。形態とは、直接感覚的に出会った実際に存在する個々のものである。形態によつて類似のものを結合する。近代自然科学においては、研究の真の対象は個々のものではなく、法則であると認める。形態をもとにして認識することは、起源や環境の異なる条件下では、完全に同種の発展を排除するゆえ、いろいろのものは、せいぜい互いに類似しているとしか理解できない。しかし法則は、その本質にしたがえば、

常に同一である。法則は確かに一個の命題として明言されることができ、それゆえ、適用のたびに常に変らない。ゲーテの場合は、直接に感覚にとらえられる事象に示されている法則を理解することである。つまり法則が形態に根ざしているのである。

二十世紀になって、ゲーテの自然科学の業績と積極的にとり組む研究者が現れた。プランク、ボルン、アインシュタイン、ハイゼンベルク、ヴァイツゼッカーらの物理学者や、動物学者ローレンツも、ゲーテの考えに注目している。一九四一年ハイゼンベルクは、「現代物理学より見たゲーテとニュートンの色彩論」という講演の中で、ゲーテあるいはニュートンの色彩論が正しいかどうかということが問題でなく、「二つの理論は、科学の大きなわく組での異なる立場に立っている。確かに、現代物理学を認めることは、自然科学者が、ゲーテの自然観察の道を歩み、したがうことを妨げるものでない」と発言している。ゲーテがニュートンに対して、また同時に、感覚的性質を抽象的性質に還元するという近代の自然科学の原理に対して、烈しい批判を行ったことは有名である。ゲーテは、眼を常に全

体に向け、直接感覚の優位を固守して、視覚器官を光源と分けるがごとき、近代物理学の全く感覚を無視したような方法には賛成できなかった。

もし誰かが、生命は物質の変化したものであるから、実験室でもつくることができるところと言うならば、『ファウスト』第二部第二幕を読んでみる必要がある。生命は神秘で侵すべからざるもの、という考えは時代遅れなのだろうか。ファウストの助手であったワーグナー博士が、人間の材料となるべき物質を集めて、レトルトの中で調査して、試験管へビーをつくることに成功する。ホムンクルスと称するこの人造人間は、ガラスの肉体があつて、精神をもたない存在である。やがて炎となつて海中に砕け散ってしまう。この場面に、ゲーテの近代の科学技術に対する深い懷疑を読みとることができ、「科学と芸術を持つている者は、宗教も持つている。科学と芸術の二つを合せ持たない者は、宗教をもて」とゲーテは教えている。

人間が真理を認識するには、とくに感覚的経験を重んずべきであるが、ゲーテの場合、その感覚的経験は、かれ独自のものであり、

代用しえない。彼は直観の目を鋭く磨き澄まして、ものごとをあるがままに見て、読みとろうと望んだ。そしてこう歌っている。

かけがえない生命を喜ぶならば  
天地一杯の幸を心して享けよ  
随所に道心を起こせ

そうすれば 過去は過ぎ去らず  
未来は今ここにあり  
現在は永遠である

これは『遺言』という詩の一節である。過去を追うな、未来を願うな、現在のことから、あるがままの実相において観察し、動ずることなく、よく見きわめて実践せよ、ゲーテはそう語りかけている。(大学工学部教授)